



神保町が 好きだ！

2021

第15号

特集 子どもの本と神保町

ご挨拶

尾崎紅葉・山田美妙・田山花袋らを育んだ日本初の投稿少年誌『**顕才新誌**』、明治期を代表する子ども雑誌『**小國民**』、近代絵本の揺籃期を象徴する富山房の「日露戦争ポンチ」シリーズなど、子どもの本は黎明期から、ここ神田神保町を舞台に花が開いてきました。

大正から昭和にかけての「ナカニシヤの絵本」、小学館の学年誌や「キンダーブック」の創刊、円本時代のアルスの「日本児童文庫」、羽田書店の宮澤賢治。

そして戦後の「岩波の少年文庫」の誕生、福音館の「こどものとも」から始まる絵本ブーム、理論社の現代児童文学、評論社の「指輪物語」や富山房の翻訳シリーズ。

このように神保町は、日本の子どもの本の歴史を刻んだ聖地ともいえるのです。この号では、こうした子どもの本と神保町、そして子どもの本の発行に情熱を燃やした出版社の歴史を辿りながら、子どもの本の聖地＝神保町を深掘りしていきます。

本の街・神保町を元気にする会

神保町が好きだ！⑮ — 目次

【特集】子どもの本と神保町

神保町は子どもの本の聖地だ！…………… 1

野上 暁（子ども文化研究家）

▼文豪たちを育んだ日本初の投稿少年誌「**顕才新誌**」1▼明治期を代表する幼年雑誌「**小國民**」3▼富山房の絵本「日露戦争ぽんち」シリーズと「新釈絵入模範家庭文庫」4▼絵本史に残る名作、中西屋の「日本一ノ画噺」シリーズ6▼小学館から世界で初めての学年別雑誌が誕生 8▼いまでも続く観察絵本「キンダーブック」が創刊 10▼円本時代の児童全集合戦とアルス 12▼羽田書店の宮澤賢治と岩波書店の「プーさん」 13▼戦後民主主義と子ども雑誌など 15▼「岩波少年文庫」と「岩波の子どもの本」 16▼子ども向け名作文学全集のブームの中で 18▼絵本の世界を変えた「こどものとも」が福音館から創刊 20▼現代児童文学を牽引した理論社とあかね書房 21▼翻訳児童文学を支えた評論社と富山房 24▼神保町は子どもの本の宝庫だ！ 26

神保町で奮闘する児童書の老舗
評論社とあかね書房の情熱…………… 31

鼎談／竹下晴信（評論社社長）・岡本光晴（あかね書房社長）
野上 暁

富山房135年の熱い歴史をふり返る…………… 42

坂本起一（富山房代表取締役社長）

【特集】子どもの本と神保町

神保町は子どもの本の本の聖地だ！

野上 暁（子ども文化研究家）

日本のマンガやアニメが世界中で人気だが、日本の子どもの本も海外での評価が高まっている。2014（平成26）年に子どもの本のノーベル文学賞とも言われる国際アンデルセン賞作家賞を上橋菜穂子が受賞したのに続き、2018（平成30）年には角野栄子が受賞して話題を呼んだ。隔年に行われる国際的な絵本賞であるブラチスラバ世界絵本原画展では、毎回日本の画家が主な賞を受賞している。

少子化により、15歳未満の子どもの数が1990（平成2）年の約2254万人から2021（令和3）年の約1493万人と大幅に激減しているにも拘わらず、児童書の売り上げは当時よりも200億円近く伸びている。この元気な子どもの本の近現代の歴史をたどってみると、本の街・神保町を舞台にした様々な物語が立

ち上がってくる。神保町は、子どもの本の聖地でもあるのだ。

▼文豪たちを育んだ日本初の投稿少年誌「えんさいしんし 天才新誌」

1872（明治5）年の学制公布により小学校が開設され、文明開化期の新しい印刷様式によって子ども向けの雑誌や読み物も出版され始める。1877（明治10）

年3月、日本で最初

の投稿専門雑誌「えんさいしんし 天才新誌」が創刊される。漢詩・和歌・作文の投稿雑誌で、本文はもちろん、表紙の書画も読者からの



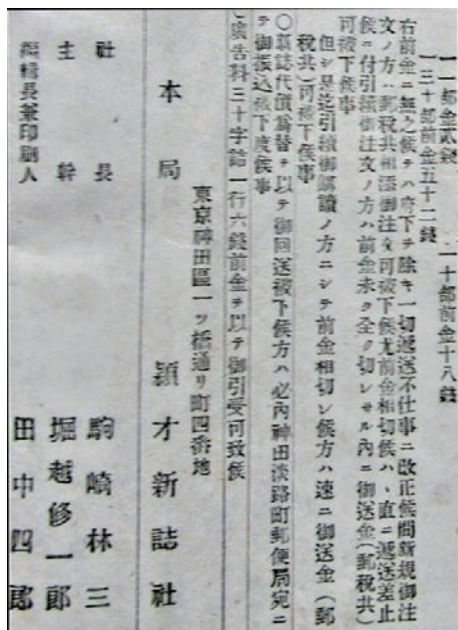
▲文豪たちを育んだ日本初の投稿少年誌「天才新誌」

投稿作品により編集されている。手元にある号の奥付を見ると、発行元の「頼才新誌社」の住所は「東京神田区一ツ橋通り町四番地」とある。

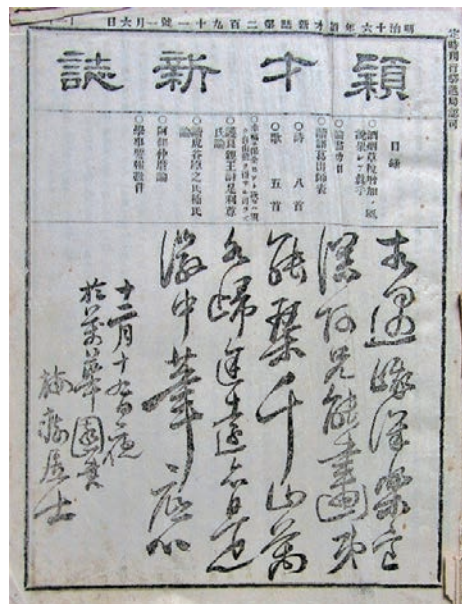
毎週土曜日に発行された週刊誌で、少年時代の尾崎紅葉、山田美妙、大町桂月、田山花袋らが文才を競ったという。田山花袋は後に『東京の三十年』（岩波文庫）で、田舎にいたころ同誌に投稿して掲載されたのを「天にも上ったように喜んだ」と記し、上京してからも當時を以下のように振り返っている。

「私は兄に就いて漢詩や和歌を学んだ。依然として『頼才新誌』の投書家であったが、一週間ごとに出る一枚二銭の雑誌が買うことが出来ないで、その毎週の発行日の土曜日の夜には、いつもきまつて遠い道を四谷の大通りの錦絵双紙店に行った。ところが、それが旨く店頭に並べられてある時は、自分の作が出たか出ないかを見るために手早くそれを翻すのはわけはなかったが、運悪く錦絵と交ぜて挿んである時には、それが出来ないでしたたか困った。一度取って貰ったのを買わずに帰って亭主に睨められたことも一再ではなかった。」（田山花袋『東京の三十年』岩波文庫）

1886（明治19）年、「小学校令」が制定されるなど、教育改革と小学校就学率の上昇に呼応して、学校教育



▲「頼才新誌」奥付ページのアップ



▲読者投稿作品による「頼才新誌」の表紙



▲月2回刊の子ども雑誌「少年園」



▲『少年文学史 明治篇 上巻』
(童話春秋社)

育を補完し強化するかのようになり、子ども雑誌が次々と登場してくる。

1888（明治21）年11月3日の天長節の日に、文部省で小学校の教科書編纂に関わっていた山県悌三郎を編集主幹として、月2回刊の子ども雑誌「少年

園」が創刊された。読者対象は中学生及びこれと同等の教養を持つ青少年とし、発行部数は1万2千部と同誌記者の弁を、木村小舟『少年文学史 明治篇 上巻』（童話春秋社）は記している。

▼明治期を代表する幼年雑誌「小國民」

翌1889（明治22）年7月には神田錦町の学齢館から「少年園」よりも読者の対象年齢を下げ、小学生をターゲットにした「小國民」が創刊される。小学校教師

だった石井研堂を編集に迎え、第3号にはグリム童話の「狼と七匹の羊」を掲載するなどの新趣向とともに、読者が小学生であることから、毎号口絵や本文の挿絵を重視。先行誌を追い抜くまで力を伸ばしていく。

富国強兵下にあつて子ども雑誌も次第に時局的な記事が多くなり、1895（明治28）年9月に掲載された無署名記事「嗚呼露国」が、日清戦争後の遼東半島還付の外交問題を批判したことから治安妨害罪に問われ、発行停止処分を受ける。



▲明治期を代表する幼年雑誌「小國民」

同年5月に「少年園」が、やはり政治問題を掲載して

発売停止になったのに次いで、日本の子どもの本史上の相次ぐ言論弾圧事件となる。日清戦争を契機に、言論表現の規制が子どもの本にも及ぶことになるのだ。

これにより、最盛期には10万部発行したという「小國民」は一時休刊を余儀な

くされるが、誌名を「少國民」に変えて再出発。しかし以前の勢いをなくし、学齡館は経営的に厳しくなり、版元が北隆館に移される。

日清戦争は子どもの本の市場にも大きな変化をもたらすことになる。1887（明治20）年に本郷弓町で創業した博文館は、1889（明治22）年2月に「日本之少年」を創刊。1991（明治24）年1月には同誌の弟雑誌として「小國民」と同様の年少読者を狙った「幼年雑誌」を創刊する。

博文館は、日清戦争が始まる1894（明治27）年当時13種の定期刊行物を出版していたが、戦争勃発に乗じ



▲「小國民」の表紙裏とカラー口絵



▲博文館の「少年世界」



▲北隆館版の「少國民」

て刊行した「日清戦争実記」で大成功を収める。その勢いに乗ってそれまでの定期刊行物を整理し、新たに「太陽」「少年世界」「文芸倶楽部」の3誌を創刊する。

「少年世界」は既刊の「日本之少年」「幼年雑誌」などを統合したもので、少年文学叢書「こがね丸」で話題を呼んだ巖谷小波を主筆に迎え、月2回刊で創刊された。表紙を見れば判然とするように、子どもの雑誌も天皇崇拜と皇室賛美、軍国主義的風潮を浸透させる役割を担わされるのだが、同誌は明治期を代表する子ども雑誌となった。

とはいえ、文明開花期を飾る少年雑誌「顕才新誌」と、明治期に一世を風靡した幼年雑誌「小國民」のいずれもが、本の街・神保町エリアから誕生したという歴史的事実は記録されてよい。

▼富山房の絵本「日露戦争ぽんち」シリーズと「新釈絵入模範家庭文庫」

近代絵本の黎明期に神保町の出版社が果たした役割も見逃せない。明治30年代の後半になると印刷技術も急速に発達し、絵を主体にした今日の絵本につながる出版物が刊行されるようになってくる。

その嚆矢（こうし）ともいえるのが富山房から刊行された「日露



▲『ぼんち御繪 明治桃太郎』（大阪国際児童振興財団所蔵）



▲『富山房五十年史』より

戦争「ぼんち」シリーズである。富山房は、1886（明治19）年に坂本嘉治馬により創立されるが、その経緯については42ページを参照されたい。

創業当初は、小野梓の東洋館から

企画を引き継いだ専門書の出版が多かったが、小学校の教科書を扱うことから、次第に子どもの本の出版にも進出していく。

1902（明治35）年、「少年世界文学」シリーズを刊行。正宗白鳥『ふしぎの魚』、中島孤島『狼太郎』、河井醉茗『神代のはなし』『はちかつぎ姫』、西村醉夢『イソップのはなし』など16巻まで出版している。

翌年には、石原万岳編『家庭のたのしみおとしばなしの巻』、『家庭のたのしみ俳諧の巻』『川柳の巻』『問答の巻』など、各16ページ4冊が山本松谷のユーモラスでわかりやすい絵を添えて刊行されるなど、幼い子向けの絵本的な造りの本も登場する。

ほぼ同時期から刊行が始まった「日露戦争ぼんち」シリーズの広告ポスターを見ると、4冊の書名の下に「石板極彩色四度刷美装每冊読切」とあり、「正償一冊金十三銭」と記されている。『富山房五十年史』巻末の出版史によると、『明治桃太郎』とのみ記されていて、北澤保次（北澤楽天）の絵で1903（明治36）年の出版となっている。

『日露ぼんち絵日本勝捷山』は、書名欄に『ボンチ日本勝捷山』、著者欄には石原萬岳作・尾竹國観畫とあり、1905（明治38）年の欄に記されている。『さる



▲『世界童話集』『日本童話宝玉選』『続グリム御伽噺』『トルストイ童話集』（富山房）

かに合戦』と『桃太郎の露西鬼（ロスキー）征伐』は、同書の出版史には見当たらない。

大正期に入って、富山房は豪華で画期的な「新釈絵入模範家庭文庫」を刊行する。1915（大正4）年刊行の『アラビヤンナイト』上下2巻からスタートした豪華な製本で、500ページ前後にもなる分厚い内外の名作シリーズである。

西条八十・水谷まさる『世界童話集』『トルストイ童話集』、楠山正雄『日本童話宝玉選』、中

島孤島『グリム御伽噺』『続グリム御伽噺』、などなど、いま見ても、その丁寧で豪華な本づくりに驚かされる。大正から昭和にかけての、裕福な家庭の子どもたちに長く愛読されたシリーズであった。

▼絵本史に残る名作、中西屋の「日本一ノ画噺」シリーズ
明治期から大正期にかけての絵本で画期的と思えるのは、中西屋から刊行された『日本一ノ画噺』シリーズである。中西屋は丸善を起こした早矢仕^{はやしゆうも}有^う的^{てき}が、丸善で売れ残った洋書や古書売るため、1881（明治14）年に神田駿河台下の小川町寄りに開いた古書店である。この中西屋より、1911（明治44）年から刊行されたのが『日本一ノ画噺』シリーズだ。

小学校入学前に親戚から5冊の箱入りセットをもらって、それで話を覚え、文字を覚えたという瀬田貞二が、同シリーズについて記した文章から、この本の形態とその後立った新鮮さがよく理解できる。

「この『画噺』は、B七判をやや細長くした小型本で、厚表紙、粘葉^{でんちよう}（というか、折本の背を糊づけした袋綴ふうになつて）の厚紙二十余丁、片面が文章、片面が絵で運ばれ、中央はみな見開きで下欄に文、絵はみな枠取りで単色ベタの色地の上に墨のシルエツトで描かれ、白抜



▲「日本一ノ画噺」復刻版（ほるぷ出版）

きがきかされていて、文は七五調の韻文体で唱歌ふうにキャプション化しています。文はすべて小波、絵は杉浦非水、岡野栄、小林鐘吉の三人がそれぞれ一冊を受けもって、全部で三十五冊（とも三十四冊とも）、昔話有り、歴史物語あり、鳥獣話あり、みな装と文と絵とが簡



▲「アヒルトニワトリ」表紙裏と扉（右）、
『日本一ノ画噺』復刻版表紙（左）



素鮮明な統一に従い、余分なもののない直截な美しさを印象づけます。版の様式的な画風は、色ベタとシルエツトと白ヌキとで意外なほど強烈なデザイン感覚をたたえ、ディテイルを排して単純化した背景にきちんと写実をきかせた形状が墨のつぶしで配されているのですから、明確なわりに想像をよび

おこす効果がありました。
（瀬田貞二『落穂ひろい』下
巻、福音館書店）

『日本一ノ画噺』は、197
8（昭和53）年にほるぷ出版
から『アヒルトニワトリ』

『キヨマサ』
『ソガキヤ
ウダイ』『ウ
ラシマ』
『カチカチ
ヤマ』『ザウ
ノアソビ』
の6冊が貼
箱入りで復
刊されてい

る。いずれも縦12・8cm、横7・6cmの小型本で、本文は見返し共取りの40ページという仕様だ。

表紙は墨版と色版2色の3色刷りだが、本文はすべて2色刷り。ページごとに違う色ベタとシルエットと白抜きだけで場面が構成されているのだが、一見して2色刷りには見えない。キャラクターの表情や仕草も変化に富み、これが実に斬新で想像力をかき立てる。

中西屋は洋書を扱っていたことから、ヨーロッパの絵本やアールヌーボーの影響などもあったのだろう。ページごとの色の変化や場面展開の巧みさは、後の絵本に様々な影響を与えたに違いない。

小波の歯切れのよい七五調の文章もリズムカルで心地よく、幼い子ども向け絵本のテキストの在り様を示唆している。『ウラシマ』など17場面の物語が30文字にも満たない、短歌のような短い文章で展開していくのだから見事である。

▼小学館から世界で初めての学年別雑誌が誕生

大正期は子ども雑誌の創刊ラッシュであった。1914（大正3）年、大日本雄弁会講談社から「少年倶楽部」、婦人之友社から絵雑誌「子供之友」。1916（大正5）年、コドモ社から「良友」が創刊される。

夏目漱石に

見いだされて作家となった鈴木三重吉が、創作に行き詰まり書店経営をめざすがそれも挫折し、糊口を凌ぐために春陽堂から出版した翻案ものの「世界童話集」のヒットから想を得て、童話童謡雑誌「赤い鳥」を創刊したのが1918（大正7）年。

この好評を追って1919（大正8）年に小川未明監修で「おとぎの世界」（文光堂）、「金の船」（キンノツノ社）、のちに「金の星」と改題し社名も金の星社に）。1920（大正9）年「童話」（コドモ社）、1922（大正11）年には絵雑誌「コドモノクニ」（東京社）が創刊



▲「金の船」は後に「金の星」と改題された



▲大正時代に創刊された「小學六年生」と「セウガク一年生」

されている。

岡山の吉田書店で、住み込みで働いていた当時17歳の相賀武夫が、吉田書店の店主・岩次郎経営の大阪研文館・東京出張所主任を命じられ、単身東京に出て神田錦町で仕事を始めたのが、1914（大正3）年。

その2年後、岩

次郎が中心になって大阪で共同出版社を立ち上げ、武夫はその東京支社長に任じられる。共同出版で学参物などを扱いながら、中学受験を意識した雑誌の創刊を構想し、自らいまの学士会館の隣あたりにあった長屋を借りて1922（大正11）年8月に小学館を設立。9月に「小學五年生」「小學六年生」10月号を同時創刊した。発行部数は各2万部だが、売れ行きはいまひとつだったらしい。

ところが、翌1923（大正12）年9月1日に関東大震災が発生し、小学館も罹災するが、「小學五年生」と「小學六年生」の印刷所は被害を免れたため、急遽大震災速報を収めて10月号を発行。他社の子ども雑誌がほとんど刊行できなかったため飛ぶように売れる。

その勢いに乗じて、1924（大正13）年に「小學四年生」、1925（大正14）年に「せうがく三年生」「セウガク二年生」「セウガク一年生」を創刊し、世界にまれなる学年別学習雑誌のラインナップが成立するのだ。

小学館の学年誌の成功をにらんで、他社からの競合誌を牽制するため、相賀武夫は、1925年9月号に「尋常小学一年男生」、10月号に「尋常小学一年女生」を集英社の社名



▲「コクミン一年生」「コクミン二年生」を統合した「良い子の友」



▲「幼稚園」は「ツヨイコイコ」に改題された



▲「こくみん三年生」「國民四年生～國民六年生」を統合した「少國民の友」

で創刊。これが集英社のスタートとなる。

1932（昭和7）年には「幼稚園」を創刊。1941（昭和16）年、国民学校令施行に合わせて「セウガク一年生」から「小學六年生」までの誌名を「コクミン一年生」から「國民六年生」に変更。1942（昭和17）年には戦時統制により「幼稚園」が「ツヨイコヨイコ」に、学年誌も「良い子の友」「少國民の友」の2誌に併合される。

敗戦後もそれぞれ合併号を刊行して継続されるが、1946（昭和21）年から順次学年別に戻り、表紙に「小学館の学年別学習雑誌」の文字が記されるようになる。

▼いまでも続く観察絵本「キンダーブック」が創刊

1907（明治40）年、高市次郎が東京飯田橋に保育用品の研究販売のために白丸屋を開店し、翌年フレール館と改称。日本初の鉄製シーソーやジャングルジム、積み木などの保育用品や教材の開発と販売を手掛けた。

1926（大正15）年4月の幼稚園令で新たに「観察」という保育項目が加わったのを受けて、1927（昭和2）年に観察絵本「キンダーブック」を創刊する。『キンダーブックの90年』（印刷博物館）に掲載されている創刊予告を見ると、「第一巻お米の巻」が「愈々九

月出来」と記されているが、同誌掲載の第1集第1編「お米の巻」の表紙写真に付されたキャプションでは、



▲「キンダーブック」創刊予告（『キンダーブックの90年』印刷博物館刊より）

観察絵本キンダーブック 第一巻 お米の巻

御 貴 助 (昭和10年)

森岸後藤倉土河和良堀
川邊尾五橋川野田川
其の他 正福清代慈五講
多 数 雄雄記室三郎丸宮み蔵
先先先先先先先先先
生生生生生生生生生

以下 乗物の巻、水の巻、お行儀の巻、牛馬の巻、電気の巻、遊戯の巻、
花の巻、お伽の巻、羊の巻、鳥の巻、お露の巻、等々、を続刊の豫定
△格で編んだ主義一貫せる幼児讀本。
△文字の讀めない幼児に取つて心の糧。
△理智と藝術の交響樂。

愈々九月末出来 至急御申し込み下さい。
お子様方にも御勧め下さい。

發行所 フレール館
東京市小石川區稻ヶ谷町
電話小石川六三〇一番
振替東京一九六四〇番

内容の次目巻一第
1. 稲の標本
2. 米食人種と動物
3. 精米の移出
4. 田舎の風景
5. 稲の栽培
6. 稲の収穫
7. 稲の脱穀
8. 稲の乾燥
9. 稲の貯蔵
10. 稲の運搬
11. 稲の消費
12. 稲の輸出
13. 稲の輸入
14. 稲の加工
15. 稲の製品
16. 稲の歴史

「二十七年二月」となっている。

また、創刊予告のフレーベル館の住所は「東京市小石川区指ヶ谷町」とあるが、1930（昭和5）年の雑誌広告では「東京神田」と記されていて、当時の奥付を見ると発行所は「神田区一ツ橋通町三十教育会館内」となっている。その後、フレーベル館は神田小川町に移り、戦後も1970年代には小川町の靖国通りに面した場所にあったが、現在は駒込に移転しているものの神保町界限での歴史は長い。

創刊予告に掲載されている「お米の巻」の目次を見るだけでも、幼児向けとはいえ、米にまつわる様々な事象を丁寧で紹介し、観察絵本にかける熱意のほどが見て取れる。幼稚園への直販だということもあって、オールカ



▲創刊号はB4横長とB5判の2種類発行（『キンダーブックの90年』より）



▲B4横長の表紙は大胆な絵を使って迫力があった

ラーB4判横長で32ページの、それまでの絵雑誌には見られない大判の場面展開に圧倒される。

創刊号は、B4横長判とB5判の2種類刊行されたようだが、B5判は店頭販売用に発行されたのだろうか。判型はその後、何度も変わっていくのは、直販ということもあって、読者のニーズを反映しながら変えていったようにも思える。

1941（昭和16）年5月の日本出版配給株式会社設立に伴い、創刊以来の直販方式ができなくなり、フレーベル館の社名も敵性語だということで、同年11月には日



▲「キンダーブック」から「ミクニノコドモ」へ改題

多くなる。

その後、戦時下の整備統合により終刊となり、「日本ノコドモ」に吸収される。戦後は1946（昭和21）年8月に復刊し、保育園幼稚園の直販雑誌として現在も刊行され続けている。

▼円本時代の児童全集戦とアルス

関東大震災は、偶然にも創立間もない小学館の躍進のきっかけになったが、出版界は概ね大きな痛手を負った。そんな中で、経営危機に見舞われた改造社が、1冊1円の薄利多売で全巻予約、毎月1冊配本の「現代日本文学全集」の刊行に社運を賭け、23万の予約を得て大成功を収める。それを追って各社が、全巻予約の同じような企画をスタートさせ、昭和の初めに期せずして、円本ブームが起こる。

本保育園に改称。

「キンダーブック」の誌名も、1942（昭和17）年4月から「ミクニノコドモ」に変え、紙面も戦争賛美が



▲「日本児童文庫」（アルス：旧阿弥陀書房）

1円の「日本児童文庫」（全76巻）をスタートさせる。

これに対抗するかのように、菊池寛と芥川龍之介を編集責任者にした「小学生全集」（全88巻）が、興文社＋文藝春秋から1冊35銭で同年同月から毎月3冊刊行された。激烈な宣伝合戦を展開し、挙句の果ては白秋と菊池寛の激しい罵り合いとなり、告訴騒ぎにまで発展する。

「日本児童文庫」は、四六判ハードカバーで装丁が恩地孝四郎、挿絵に初山滋や岡本帰一を起用。「小学生全集」は菊判ソフトカバーで装丁は武井武雄他。どちらも30万部売れたといい、昭和戦前期に子どもだった世代には、

北原白秋の弟・北原鉄雄が、白秋を顧問にして1915（大正4）年に立ち上げた阿弥陀書房は、2年後にアルスと改称して、神田神保町三丁目に事務所を構えた。そして円本ブームに便乗し、1927（昭和2）年3月、白秋ほかを顧問にして1冊50銭、2冊で



▲『小学生全集』（興文社＋文藝春秋）



▲小川未明『夜の進軍喇叭』（「アルス新日本児童文庫」より）

講談社の絵本と同様に印象に残るシリーズだったようだ。

アルスはその後、「アルス新日本児童文庫」をスタートさせ、長与善郎『世界の文化に盡した人々』、武者小路実篤『二宮尊徳』、百田宗次『私たちの綴方教室』、小川未明『夜の進軍喇叭』、坪田譲治『父は戦に』などを刊行している。

▼羽田書店の宮澤賢治と岩波書店の「プーさん」

岩波書店は、岩波茂雄により1913（大正2）年に古書店としてスタートするが、翌年、夏目漱石の『こゝろ』の出版がきっかけで急成長し、昭和に入って円本

ブームの後に岩波文庫を創刊するなど大躍進する。

その岩波茂雄が、東京朝日新聞政治部記者から鉄道大臣秘書官になり、衆議院議員にもなった羽田武嗣郎の相談を受けて、スタート時に岩波書店が販売を請け負い、羽田が1937（昭和12）年に創業させたのが羽田書店である。神田神保町、神田駿河台などに社屋を構え、戦後まで営業を続けるが、戦前にいち早く宮澤賢治の著作を出版したことで有名だ。

1933（昭和8）年、37歳の若さで亡くなった宮澤賢治には、生前に自費出版した詩集『春と修羅』と童話集『注文の多い料理店』の2冊しかなかったが、1939（昭和14）年3月、羽田書店から『宮澤賢治名作選』（上下2巻）を刊行。続けて羽田書店は、同年12月に『風の又三郎』、1941（昭和16）年に『グスコブドリ』の伝記』を、それぞれ立派なケース入りの華麗な装丁の単行本にして話題を呼んだ。

『風の又三郎』の最終ページに自社の広告が掲載されているが、それに並んで、十字屋書店の『宮澤賢治全集』（全6巻）も紹介されている。戦前に出版された唯一の宮澤賢治全集である。十字屋書店の住所が「神田区神保町一丁目」とあり、同社は新刊書店として今も神保町で営業している。

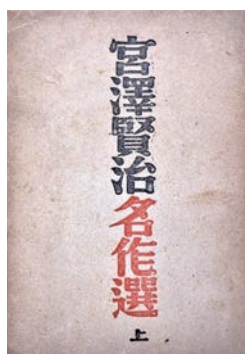
宮澤賢治全集 全六巻 新刊刊 各巻約六百頁 上製函入 東京市神田區神保町一丁目 振替東京二四四八九番 十字屋書店	羽田書店刊行 <table border="1"> <tr> <td data-bbox="356 342 450 809"> わが山河 北支那の印象・農村觀察記・他四篇 上泉秀信 著 中川一政 装幀 四六判三七〇頁 上製函入 定價二圓二錢 送料十四錢 </td> <td data-bbox="450 342 544 809"> 土に叫ぶ 宮澤賢治の愛弟子である松田氏がものした農村更生の雄叫び！ 松田甚次郎 著 宮澤賢治の愛弟子である松田氏がものした農村更生の雄叫び！ 四六判四一〇頁 寫眞三 定價一圓二十錢 送料十錢 </td> <td data-bbox="544 342 658 809"> 宮澤賢治名作選 文部省推薦 松田甚次郎 編 默々と筆をとり、自然と人生を敬虔な態度で探求求めた天才童作家の絶品 農民文學の珠玉 四六判五九八頁 寫眞十一葉 布裝上製函入 定價十一圓四錢 送料十四錢 </td> </tr> </table>	わが山河 北支那の印象・農村觀察記・他四篇 上泉秀信 著 中川一政 装幀 四六判三七〇頁 上製函入 定價二圓二錢 送料十四錢	土に叫ぶ 宮澤賢治の愛弟子である松田氏がものした農村更生の雄叫び！ 松田甚次郎 著 宮澤賢治の愛弟子である松田氏がものした農村更生の雄叫び！ 四六判四一〇頁 寫眞三 定價一圓二十錢 送料十錢	宮澤賢治名作選 文部省推薦 松田甚次郎 編 默々と筆をとり、自然と人生を敬虔な態度で探求求めた天才童作家の絶品 農民文學の珠玉 四六判五九八頁 寫眞十一葉 布裝上製函入 定價十一圓四錢 送料十四錢	
わが山河 北支那の印象・農村觀察記・他四篇 上泉秀信 著 中川一政 装幀 四六判三七〇頁 上製函入 定價二圓二錢 送料十四錢	土に叫ぶ 宮澤賢治の愛弟子である松田氏がものした農村更生の雄叫び！ 松田甚次郎 著 宮澤賢治の愛弟子である松田氏がものした農村更生の雄叫び！ 四六判四一〇頁 寫眞三 定價一圓二十錢 送料十錢	宮澤賢治名作選 文部省推薦 松田甚次郎 編 默々と筆をとり、自然と人生を敬虔な態度で探求求めた天才童作家の絶品 農民文學の珠玉 四六判五九八頁 寫眞十一葉 布裝上製函入 定價十一圓四錢 送料十四錢			

▲宮澤賢治『風之又三郎』の巻末広告に十字屋書店の宮澤賢治全集の広告も

文庫の歩み』（岩波書店）には記されている。とはいえず、1940（昭和15）年に、石井桃子訳でミルンの『熊のプーさん』を刊行。翌年には同じミルンの『プー



▲『グスコブドリの傳記 童話』（宮澤賢治 作／横井弘三 装丁挿画）



▲『宮澤賢治名作選 (上)』（羽田書店）



▲宮澤賢治『注文の多い料理店』（私家版）

岩波書店は、1940年ごろから子どものための名作文庫の企画が進み、豊島与志雄、中野好夫、吉田甲子太郎と編集部で討議を続けて、1943（昭和18）年には最初の20冊の刊行が決まり、その一部は校正刷りまで出ていたという。

しかし統制機関・日本出版文化協会の激しい反対により挫折させられたと『岩波少年

横町にたった家』を出版するなど、戦時下にも拘わらず英語の本を翻訳出版し、戦後の海外児童文学翻訳出版の礎となる。

▼戦後民主主義と子ども雑誌など

敗戦に伴うGHQによる戦後の民主化の機運の中で、民主的とか良心的とかいわれた子ども雑誌「赤とんぼ」（実業之日本社）や「子供の廣場」（新世界社）や「銀河」（新潮社）が1946（昭和21）年に創刊され、1947（昭和22）年には「童話教室」（柏書房）、1948（昭和23）年には「少年少女」（中央公論社）などが相次いで創刊され、「赤い鳥」の再来などともてはやさ



▲「赤とんぼ」（実業之日本社）と「子供の廣場」（新世界社）



▲「少年少女」（中央公論社）と「銀河」（新潮社）

れた。

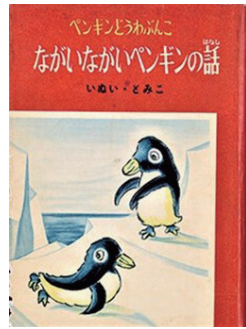
神保町界隈からも神田錦町の柏書房から「光の子供」、九段一丁目にあった桐書房から「少年オール」などが刊行されていた。

しかし、絵物語やマンガを掲載した大衆的な子ども雑誌「おもしろブック」「幼年ブック」（集英社）などの台頭により、1949（昭和24）年から1951（昭和26）年にかけて、それらのほとんどが休刊することになる。親や教師には歓迎されたものの、子どもたちは娯楽雑誌のほうに引き寄せられていったのだ。

大正期に「令女界」（1922〜50年）を創刊して一



▲「光の子供」（柏書房）、「少年オール」（桐書房）「おもしろブック」「幼年ブック」（集英社）



▲『三太物語』と、いぬいとみこ『ながいながいペンギンの話』（宝文館）

筒井敬介脚色『三太物語』などを出版。宝文館は、いまでも読み継がれている、いぬいとみこの『ながいながいペンギンの話』（現在は、理論社・岩波少年文庫）を最初に出版した版元でもある。

▼「岩波少年文庫」と「岩波の子どもの本」

敗戦から5年後の1950（昭和25）年5月、宮城県に疎開中の石井桃子は、岩波書店取締役の小林勇と吉野源三郎から再三の誘いを受けて、同社に嘱託社員として

世を風靡した、神保町の出版社・宝文館は、NHKラジオドラマで大ヒットした菊田一夫の『君の名は？』を出版してベストセラーになる。

そのつながりで、やはりNHKラジオで子どもたちを熱狂させた、『新諸国物語 笛吹童子』（3冊）や青木茂原作・

年文庫」5冊を創刊させた。

それまで、グリムやアンデルセンをはじめ、海外児童文学の名作はたくさん出版されてきたが、ずさんな翻訳や改訳が多いことを憂慮し、原作の本当の姿を伝えようと、子どもたちにわかりやすく楽しく読めるものにしたというのが、このシリーズ創刊の狙いであった。



▲岩波少年文庫の「寶島」（R.L. スティーヴンソン 作）、「あしながおじさん」（ジーン・ウェブスター 作）、「牛追いの冬」（マリー・ハムズン 作）

入社し、戦中からの同社の念願だった少年文庫の編集に関わる。

そして、石井は、戦前に校正刷りまで出ていた作品の中から、『寶島』『あしながおじさん』『クリスマスキャロル』の3冊を選び、戦後のケストナーの新作『ふたりのロッテ』に、自分が疎開中に翻訳した『牛追いの冬』を加え、7か月後の12月25日、クリスマスに合わせて「岩波少

以後70余年にわたって途切れることなく、海外の児童文学作品を中心に刊行され続けている。

2021（令和3）年3月に刊行された若菜晃子編著『岩波少年文庫のあゆみ 1950-2020』（岩波書店）には、創刊の経緯や関係者のエッセイなどを交え、歴史を振り返るとともに、創刊から現在までの総目録が付されている。

占領下の仙花紙絵本時代にも海外の絵本がぼつぼつと紹介されてきていたが、海外絵本の翻訳出版が本格化するのには「岩波の子どもの本」シリーズがスタートしてからである。

「岩波少年文庫」を成功させ、戦前からアメリカをはじめ海外の子どもの本の情報を集めたり、自らも翻訳してきた石井桃子を編集長に、光吉夏弥も加わって、今日まで読みつがれてきた「岩波の子どもの本」は、1953



▲『岩波少年文庫のあゆみ 1950～2020』（若菜晃子編著）

月から刊行が始まる。

第一回配本は、『ちびくろ・さんぼ』『ふしぎなたいこ』『ね



▲『ひとまねこざる』（H.A.レイ著／光吉夏弥訳）



▲『ちいさい おうち』（バージニア・リー・バートン 作／石井桃子 訳）



▲『どうぶつ会議』（エーリヒ・ケストナー 著／ワルター・トリヤー 絵／光吉夏弥 訳）

ずみとおうさま』『みんなの世界』『スザンナのお人形・ビロードのうさぎ』『山のクリスマス』の6冊で、1954（昭和29）年12月までのあいだに24冊刊行されている。そのうち、『ふしぎなたいこ』『おそぼのくきはなぜあかい』の2冊を除いて、全て海外の作品である。

中でもバンナーマンの『ちびくろ・さんぼ』は人気で、広く読み継がれてきたが、差別意識が問題となり1988（昭和63）年に絶版となる。レイの『ひとまねこざる』やバートンの『ちいさいおうち』も、当初は文章を縦書きにしたため逆版使用があったものの、原著に合わせて改変されながら、今日まで親しまれ続けている。ケストナーの『どうぶつ会議』



▲「日本児童文学全集」(全12巻) 河出書房

は、後に大型版の新訳が刊行されたが、今日でも旧版が生き続けている。このシリーズは、後の日本の絵本出版に大きな影響を与えることになる。

▼子ども向け名作文学全集のブームの中で

「岩波少年文庫」の成功は他社にも影響を与え、また戦後のベビーブームの子どもたちが小学校に順次入学してくる時期とも重なり、各社から様々な児童文学全集が刊行されることになる。

1953(昭和28)年、

当時小川町にあった河出書房から刊行された「日本児童文学全集」(全12巻)は、明治期の巖谷小波から始まり、詩や童謡、脚本や少年少女小説まで網羅した画期的な全集だった。

河出書房は、60年代後半には完訳版で「少年少女世界の文学」(全24巻+別巻2巻)も刊行して



▲魅力的なタイトルが並ぶ「世界名作物語選書」



▲「日本おとぎ文庫3」の『いっすんぼうし』

いる。1953(昭和28)年、創元社から刊行された、「世界少年少女文学全集」(全50巻)は、古典的な世界名作を中心にして1956(昭和31)年11月まで毎月1冊ずつ配本され、世界名作ブームの先駆けとなる。

1949(昭和24)年4月、岡本睦人が「日本おとぎ文庫」(全3巻)を刊行して、神保町一丁目で創業したあかね書房は、同年12月に川端康成著・武井武雄装画『青い鳥』を第1巻に「世界名作物語選書」(全8巻)をスタートさせている。と同時に、村松武夫

著・熊田五郎装丁『イソップどうわ』を第1巻とした「世界童話集」も並行して出版。1950（昭和25）年12月には、北条誠文『小公女』と宮澤賢治『風の又三郎』の2冊同時刊行で「世界絵文庫」（全50巻）を刊行するなど、他社に先んじて早くから名作シリーズを刊行してきた。

そして1954（昭和29）年、志賀直哉・谷川徹三・石川脩平監修による、「少年少女日本文学全集」（全50巻）を亀井勝一郎編『夏目漱石名作集』を第1巻として刊行。全30巻の本格的で斬新な子ども向けの文学全集だったから反響も大きく、爆発的な人気を呼び増刷に増刷を重ねたという。あかね書房の創業とその後については、31ページのインタビューを参照されたい。

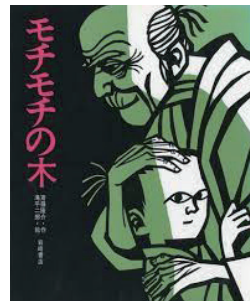
1948（昭和23）年、神保町に新社屋を建てた岩崎書店も、教科別の学習シリーズをたくさん出版していたが、1959（昭和34）年に「少年少女世界名著選集」（全15巻）、1961（昭和36）年に「世界少女名作全集」、1965（昭和40）年に「世界ひらがな童話集」など、ユニークな全集を次々と刊行した。70年代には、『モチモチの木』『花さき山』などの絵本で話題を呼ぶ。創元社の全50巻の名作が大ヒットしたことを追って、1958（昭和33）年、講談社は創立50周年の記念企画



▲『少年少女世界の名作文学』（小学館）



▲『世界おはなし名作全集』（小学館）



▲『モチモチの木』（斎藤隆介 文／滝平二郎 絵）

スタートさせて大ヒットし、後続企画として1964（昭和39）年、「少年少女世界の名作文学」（全50巻）を刊行。以後、小学館では1989（平成元）年の「世界おはなし名作全集」（全12巻）に至るまで、名作全集を度々刊行することになる。

として「少年少女世界文学全集」（全50巻）を刊行。その成功を追うように、小学館も1960（昭和35）年に「少年少女世界名作文学全集」（全56巻）を



▲「こどものとも」創刊号（左）と第2号（右）

▼絵本の世界を変えた「こどものとも」が福音館から創刊「岩波の子どもの本」が紹介した欧米の絵本から、絵本の素晴らしさと物語絵本の魅力を知ったという福音館書店の若き編集者松居直は、1959（昭和34）年に神田三崎町で直販方法による月刊物語絵本「こどものとも」を創刊する。

創刊号は「ビップとちようちよう」（4月号）、第2号が「セロひきのゴーシュ」（5月号）。毎号1冊丸ごと一つの物語を紹介する点が、これまでの絵本雑誌との大きな違いである。9号

でアンデルセンの

「マッツウリのしよ

うじょ」を紹介する

など、海外の名作を

随所に挟みながら、

B5判・縦長・中綴

じ・右開き・本文16

ページの仕様で63号

まで続ける。

そして64号（19

61「昭和36」年7

月号）の「とらつく

とらつくとらつく」から横長に変える。その後「スー

ホの白い馬』『おおきなかぶ』『だいくとおにろく』『かばくん』『ふしぎなたけのこ』『しょうぼうじどうしゃ



▲『しょうぼうじどうしゃ じぶた』（渡辺茂男 作／山本忠敬 絵）



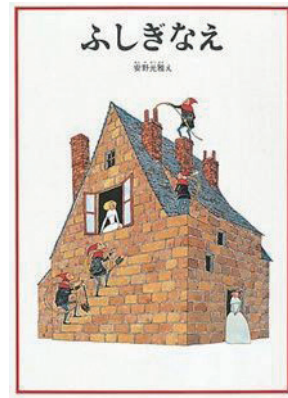
▲『スーホの白い馬』（大塚勇三 再話／赤羽末吉 画）



▲『だるまちゃんとてんぐちゃん』（加古里子 作・絵）



▲『おおきなかぶ』（A・トルストイ 作／内田莉莎子 訳／佐藤忠良 絵）



▲「ふしぎなえ」(安野光雅 作・絵)

次々と誕生する。

「こどものとも」からはその後も『だるまちゃん』とてんぐちゃん』『ふしぎなえ』『ごろごろにゃーん』などなど、絵本史に残る傑作がたくさん誕生している。

福音館書店は、「こどものとも」の成功から、同じように1冊1テーマの月刊科学絵本雑誌「かがくのとも」を1969(昭和44)年4月号から創刊する。創刊号の「しっぽのはたらき」は、新しいスタイルの動物絵本として、後に教科書にも採用された傑作だ。

初期の「かがくのとも」では、谷川俊太郎の写真絵本「こっぷ」が衝撃的で、その後、長新太と組んだ『わたし』や『きもち』などは、これまでにない画期的なテーマに挑んだ絵本として記憶に残る。

じふた』『ぐりとぐら』が登場するなど、それぞれ後にハードカバーの単行本絵本となつて、今日まで読み継がれる名作が



▲谷川俊太郎の写真絵本「こっぷ」と長新太と組んだ「わたし」



▲画期的な月刊科学絵本雑誌「かがくのとも」

▼現代児童文学を牽引した理論社とあかね書房

1950年代末から60年代にかけて、テレビの急速な普及と少年週刊誌の登場によるマスコミ時代の到来に合わせ、所得倍増計画と高度経済成長をバックにして、子どもの本にもわかに市場拡大し活性化していく。

1959(昭和34)年には佐藤さとるの『だれも知らない小さな国』(講談社)、いぬいとみこの『木かげの家

の小人たち』（福音館書店）、そして理論社から「創作少年文学シリーズ」として塚原健二郎の『風と花の輪』など4冊が刊行される。

理論社は、小宮山量平によって1947（昭和22）年に創業し、当初は季刊誌「理論」などを発行していたが、子どもの将来への期待から児童文学の新しい潮流をとらえた創作シリーズを刊行。1960（昭和35）年には、山中恆の『とべたら本こ』『赤毛のポチ』、今江祥智の『山のむこうは青い海だった』。1961（昭和36）年には、神沢利子の『ちびっこカムのぼうけん』、寺村輝夫の『ぼくは王さま』など、今日まで読み継がれている



▲『ぼくは王さま』（寺村輝夫 作）



▲『風と花の輪』（塚原健二郎 作）



▲『赤毛のポチ』『とべたら本こ』（山中恆 作）



社や偕成社も創作児童文学に力を入れていたが、神保町一丁目からスタートした、あかね書房の「日本の創作幼年童話」（全25巻）は、画期的な幼年文学シリーズとして話題を呼んだ。1968（昭和43）年に、『どうぶつえんができた』からスタートし、『ふらいばんじいさん』などの傑作をたくさん生んだ。

1971（昭和46）年、『小説の書き方』から刊行が



▲『兎の眼』『太陽の子』（灰谷健次郎 作）

作品が次々と登場する。

理論社は神田神保町一丁目にあり、70年代には灰谷健次郎の『兎の眼』や『太陽の子』など、100万部を超えるベストセラーまで出版し、児童文学の黄金時代を支えるのだ。

同時期、講談



▲『ぼっぺん先生と帰らずの沼』(舟崎克彦 作)



▲『絵にかくとへんな家』(さとうまきこ 作／小林与志 絵)



▲『真夏の旗』(三木卓 作／篠原勝之 絵)



▲『小説の書き方』(吉田とし 作／山藤章二 絵)



▲『白いおうむの森』(安房直子 作／赤星亮衛 絵)

始まった「少年少女長編創作選」(全10巻)では、『千本松原』が課題図書になって大ヒットし、『真夏の旗』『絵にかくとへんな家』など、意欲作をたくさん輩出して話題になった。

また、神田小川町三丁目にあった筑摩書房も、70年代には舟崎克彦の『ぼっぺん先生の日曜日』に

辻邦生の『ユリアと魔法の都』を第1冊目とした「ちくま少年文学館」を興し、小松左京の『青い宇宙の冒険』、天沢退二郎の『光車よ、まわれ!』など、児童文学プロパーではない作家たちの作品を刊行して話題を呼んだ。



▲『光車よ、まわれ!』(天沢退二郎 作)



▲『ユリアと魔法の都』(辻邦生 作／勝本富士雄 絵)

賞を受賞した『ぼっぺん先生と帰らずの沼』などの「ぼっぺん先生」シリーズや、安房直子の童話集『白いおうむの森』『銀のくじゃく』『天の鹿』などの児童文学の傑作を送り出していた。

▼翻訳児童文学を支えた評論社と富山房

「岩波少年文庫」で海外作品を次々と刊行してきた岩波書店は、その後もケース入りでハードカバーの愛蔵版や、『長くつ下のピッピ』を第1巻とする「リンドグレーン作品集」（全12巻・別巻6巻）、ルイスの『ライオンと魔女』に始まる「ナルニア国ものがたり」（全7巻）、「アーサーランサム全集」（全12巻）、トールキンの

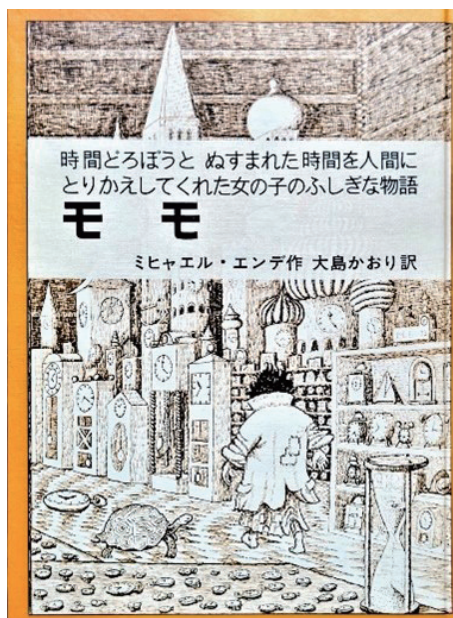


▲『影との戦い ゲド戦記 I』（U.K. ル・グウィン 作／清水真砂子 訳）



▲『ライオンと魔女』（C.S. ルイス 作／瀬田貞二 訳）

『ホビットの冒険』、ル・グウィンの『ゲド戦記I』（影との戦い）、ミヒャエル・エンデの『モモ』など、60年代から70年代にかけて海外の名作の翻訳を次々と刊行し、このジャンルを牽引し



▲『モモ』（ミヒャエル・エンデ 作・絵／大島かおり 訳）



▲『ホビットの冒険』（J.R.R. トールキン 作／瀬田貞二 訳）

てきた。
それとともに、この時期に神保町二丁目にあった評論社から出版された、トルキンの『旅の仲間』から始まる「指輪物語」(全6巻)など、海外の翻訳児童文学作品群はファンタジーブームの先駆けとなったばかりか、後の日本の子どもの本に多大な影響を与えた。評論社の



▲『タランと角の王』(ロイド・アリグザンダー 作/神宮輝夫 訳)



▲『旅の仲間 (上・下)』(J.R.R. トールキン作/瀬田貞二訳)

「児童図書館・文学の部屋」には、ロイド・アリグザンダーの『タランと角の王』、ルーシー・M・ボストンの『グリーン・ノウの子どもたち』に始まる「グリーン・ノウ・シリーズ、ロアルド・ダールの『チョコレート工場』の秘密」、



▲『ウィロビー・チェースのおおかみ』(ジョン・エイケン 作/大橋善恵 訳)



▲『小さな魚』(エリック・C・ホガード 作/大橋善恵 訳)



▲『ふくろう模様の皿』(アラン・ガーナー 作/神宮輝夫 訳)

アラン・
ガーナーの
『ふくろう
模様の皿』
などの名作
がたくさん
誕生してい
る。

明治・大
正期から子
どもの本を
手掛けてき
た富山房も
60年代後半
から海外作

品の翻訳を始め、児童書を刊行。エリック・C・ホガード
の『小さな魚』ジョーン・エイケンの『ウィロビー・
チエースのおおかみ』マリア・グリーペの『忘れ川をこ
えた子どもたち』クリーパーの『グローバーくん』な
ど、優れた海外作品を意欲的に翻訳出版した。

大ベストセラーになったセンダックの『かいじゅうた
ちのいるところ』の出版に至った経緯や児童書を手掛け



▲『グローバーくん』（ビル・ク
リーパー、ベラ・クリーパー 共
著／井上みどり 訳）



▲『忘れ川をこえた子どもたち』
（マリア・グリーペ 作／太久保貞
子 訳）



▲『クレヨンで描いた おいしい魚図鑑』（加
藤休ミ 作）



▲『たんぼぼのお酒』（レ
イ・ブラッドベリ 作／
北山克彦 訳）

るきっかけについては、44ページを参照いただきたい。
▼神保町は子どもの本の宝庫だ！
現在、神田神保町三丁目にある平凡社も、1964

（昭和39）年に当時としては画期的な大判でオールカ
ラー、全12巻の「えほん百科」を出版し、後の小学館
「21世紀こども百科」などのビジュアル展開に大きな影

響を与えた。また、

「別冊太陽」の長新
太や、かこさとしな
どの絵本作家シリ
ーズも好評だ。

また、神田神保町
一丁目の晶文社の本
も見逃せない。『た
んぼぼのお酒』に始
まる「文学のおくり
もの」シリーズはロ
ングセラーになって
いるし、最近の『お
いしい魚図鑑』など
の絵本も話題になっ

ている。

戦後間もなく、山川惣治の『少年王者』を刊行して再スタートを切った集英社の子どもの本も秀逸だ。戦前から戦後にかけて「ひろすけ童話」として多くの子どものちに親しまれてきた作品を集大成した『浜田廣助全集』や奥本大三郎『ジュニア版ファール昆虫記』などの全集の他、『むくどりのゆめ』『ないた赤おに』



▲『ジュニア版ファール昆虫記』（ジャン・アンリ・ファール 作／奥本大三郎 訳・監修）



▲『浜田廣助全集』（集英社）



▲『なんていいんだぼくのせかい』（荒井良二 作）



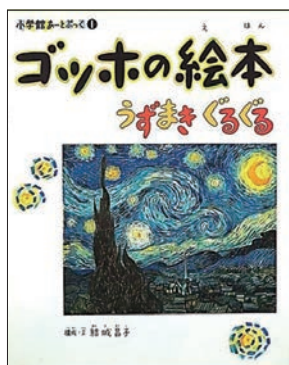
▲『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』（ベン・シャーン 絵／アーサー・ビナード 作）

『りゅうの目のなみだ』などの「ひろすけ童話絵本」も刊行してきた。

ベン・シャーンの絵をもとにアーサー・ビナードが文章を付けた『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』などのユニークな絵本や、荒井良二の『なんていいんだぼくのせかい』『どーしたどーした』などのユニークな絵本も刊行している。

また、人気コミックスのノベライズなどを核にして今年10周年を迎える「みらい文庫」も大人気だ。

兄弟会社



▲『ゴッホの絵本 うずまきぐるぐる』（結城昌子 構成・文）

の小学館も、90年代の「21世紀こども百科」はシリーズ化して毎年刊行され、「小学館の図鑑NEO」は、幼児から使える本格的な図鑑として巻を重ね、DVD付も大人気で、子ども向け図鑑の王者となり周辺企画も充実している。

結城昌子『ゴッホの絵本 うずまきぐるぐる』（1993年）に始まる「小学館あーとぶっくシリーズ」は、今年16巻目の『これが鳥獣戯画でござる』を刊行して相変わらずの人気だ。絵探し翻訳絵本の『ミッケ!』シリーズは累計で、なんと850万部を突破したというからすごい。

谷川俊太郎の詩の絵本『いちねんせい』（和田誠 絵）も超ロングセラーだし、最近ではミロコマチコ『まっくらやみのまっくら』などの創作絵本も話題を呼んでいる。

また、モーパールの『トンネルの向こうに』『フラミンゴボーイ』、ルイス・サッカードの『泥』などの翻訳児童文学や、

小手鞠るい『窓』、村上しいこ『イーブン』などの創作児童文学の話題作も出版されている。

学年別学習雑誌は21世紀に入り、「小学六年生」以下「小学二年生」まで順次休刊となるが、「幼稚園」と「小学一年生」は健在だ。雑誌が全体的に苦戦している中で、「幼稚園」は奇抜な付録でしばしば話題になり、小学館は来年、「小学一



▲『いちねんせい』（谷川俊太郎 詩／和田誠 絵）



▲『ミッケ!』（ジーン・マルゾーロ 作／ウォルター・ウィック 写真／糸井重里 訳）



▲『これが鳥獣戯画でござる』（結城昌子 作）



▲『窓』（小手鞠るい 作）



▲『まっくらやみのまっくら』（ミロコマチコ 作）

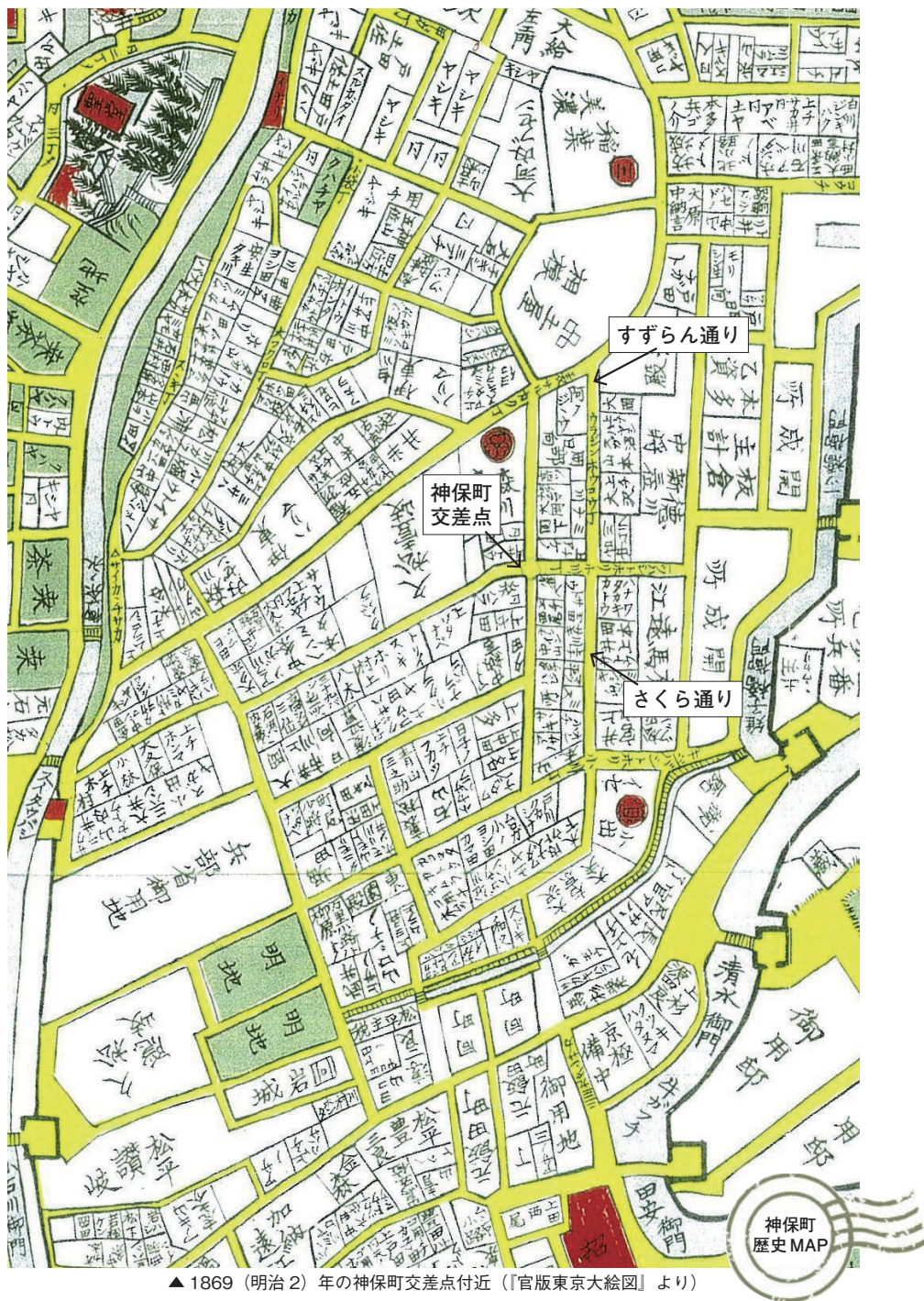
年生」は3年後にそれぞれ創業・創刊100周年を迎える。

こうして、明治の文明開化期から現代まで、神保町を舞台にしてきた子ども本の歴史を通観すると、神保町近辺の版元の果たした役割の大きさが浮かび上がってくる。それはまさに、本の街・神保町ならではの歴史の重みでもある。

そして、子ども本の専門店ブックハウスカフェも、絵本の原画展や絵本作家や童話作家を招いた様々なイベントを展開し、話題を提供している。神保町は、いまも子どもの本の宝庫なのだ。



▶ 1万冊を超える絵本と美味しいカフェがあり、イベントも開催されているブックハウスカフェ



▲ 1869 (明治 2) 年の神保町交差点付近 (『官版東京大絵図』より)

【特集】子どもの本と神保町

神保町で奮闘する児童書の老舗

評論社とあかね書房の情熱

竹下晴信（評論社社長）

岡本光晴（あかね書房社長）

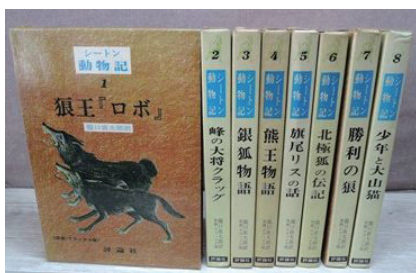
野上 暁（子ども文化研究家）

野上 評論社とあかね書房は、それぞれ1948（昭和23）年、1949（昭和24）年と戦後間もない頃、出版界が多様化していく中で神保町からスタートするわけですが、創業時のエピソードを聞かせてください。

竹下 評論社は戦前・戦中と印刷業をやっていた、戦争が激しくなることを見据えて印刷機械を父の郷里に疎開させたところ、その列車が爆撃に遭って印刷機械が使えなくなりました。クローニン全集を翻訳し、「風と共に去りぬ」「唯物論全集」（三笠書房）を出した竹内道之助が私の叔父にあたり、その導きで出版を興したのが評論社です。社名も竹内の命名でした。

最初は人文系の本を刊行し、売れない本ばかり出していたんです。返品の手で大変でした（笑）。

それから、公務員になるための知識を授ける法律・経



▲発売当時の箱に入った「シートン動物記」

済関係書を出版し、1950年代に入ると『テーブル式数学Ⅲの基本演習』『テーブル式フランス語便覧』といったテーブル式学参や語学シリーズを出して、会社の

基礎ができました。

野上 子どもの本としては、『シートン動物記』が有名でしたね？

竹下 『シートン動物記』は1951（昭和26）年に全19巻で刊行しました。私の母が中心となって「私（母）がいいと思った本はなんでも出す」という姿勢でした。

野上 同時期に創業したあかね書房はいかがですか？

岡本 もともと長野出身（旧中条村）の祖父・岡本陸人（1912「明治」45年生まれ）が創業者ですが、1926（大正15）年に東京堂で社員募集があつて、一念発起して上京しました。その祖父の幼少時、親戚の家に少年誌や雑誌があつて、貪るようにして読んだ体験が、後に出版社を興すきっかけになったようです。

東京堂には19年間勤めていましたが、戦後、あかね書房を創業する前に、東海書房という理系専門書の会社に営業部長として勤めていました。児童図書をやりたいという思いがあつたので、東海書房の了解のもと、独立に向けて神田神保町の鋳谷書店に間借りして準備していました。岡本と鋳谷社長とは、岡本が東京堂時代からの知友の間柄だったのです。

野上 そんなご縁があつたんですね。あかね書房はス



▲ 1949（昭和24）年に出版された日本おとぎ文庫『①かちかち山』『③いっすんぼうし』松村武雄、鈴木三重吉 共著

たのだと思います。

巖谷小波の作品を出したいというのがあり、ご子息が鎌倉文庫で編集をされていて、ツテがあつて訪ねていきしました。そこで巖谷大四さんと知り合つて、大四さんはその後、河出書房で編集長を務めたそうですが、とてもお世話になったようです。

大四さんは文芸関係との付き合いも多かったのです、そ

タート時から子どもの本を出版してきましたね。

岡本 たぶん岡本の幼少時の体験が大きくて、実際に出版業界に携わつていたので、どうせやるなら子どもの本の出版社を！という思いが強かつ



▲「少年少女日本文学選集」の『川端康成名作集』と『志賀直哉名作集』

れで川端康成先生と懇意にしていたようです。1955（昭和30）年に「少年少女日本文学選集」（全30巻）を出版したのも、そういった経緯です。

野上 河出書房も出したけれど、子どものための文学選集としてはしっかりした画期的なシリーズでしたね。

岡本 口絵とか写真を筑摩（書房）さんからお借りしたと聞いていますが、当時はそうした版元同士のやり取りもあつたのかもしれません。

野上 ところで、評論社で翻訳ものを次々に始めたのは、竹下さんが入社されてからです。1964（昭和39）年にカナダに留学されたと聞いています。

竹下 はい、カナダに留学し

て、今でも付き合ひのあるアメリカ人の留学生が、僕の英語がたどたどしいので、「まずは、子どもの本を読んでみな！」と紹介されたのが『ライオンと魔女』（日本語版は岩波書店）だったんです。それを読んでみて「子どもの本って、こんなに面白いのか!」と思ったのです。

児童文学の面白さに惹かれましたよ。カナダって寒いところですから、大学の施設が地下道で繋がっているんですね。その地下道を通って本館に行く途中に図書館への入口があつて、入ることになりました。

児童文学関係の図書や資料がとても充実していて、この司書がとても丁寧に教えてくれました。また、トロントの公立図書館では、ボーイズ・アンド・ガールズハウスという児童室があり、そこが発行しているブックリストで、4〜500冊のリストを手掛かりにして書店に行ったりしました。そんな形で児童書と出合ったのです。

野上 児童文学作家で翻訳家の石井桃子さんもそこにいらっしやった？

竹下 石井さんも、瀬田さん渡辺さんと共に翻訳した『児童文学論』（岩波書店）の作者がリリアン・スミスさんで、その児童室に関係されていたようです。その児童室にガラス戸がありまして、オズボーンコレクションの稀覯本をのぞけるようになっていて、これって凄い配置

の仕方ですね。来館する子どもたちにも本物が身近に見られるのですから。

野上 そのリストの中から、目を付けた作品があるんですか？

竹下 『ナルニア国物語』が出会いましたから、勢いで、ファンタジー作品に目を奪われました。1968（昭和43）年に出したのが、「グリーン・ノウ物語」でした。シリーズ全6巻で、訳したのは亀井俊介さん。でも、一番早く出版したのは、じつは増田孝一郎著の『化石』という本なのですが。

結局、そのブックリストや図書館での影響が、「科学の部屋」「文学の部屋」「社会の部屋」という小シリーズからなる児童図書館シリーズが、10年〜20年たって充実すればいいと考えました。

野上 トールキンの『ホビットの冒険』を先に岩波書店が出版していたので、評論社が同じトールキンの『指輪物語』の翻訳権を取るの大変だったのでは？

竹下 ファンタジーの本を探していたら、『指輪物語』に行き当たったのですが、岩波書店は「子どもの本じゃない」ということで取らなかつたのではないでしょう。ただ、田中明子さんと並んだ共同訳者の瀬田貞二さんは、岩波書店の諒解のもとで翻訳をお引き受けいた



▲『グリーン・ノウの子どもたち』（ルーシー・M・ボストン 作／ピーター・ボストン 絵／亀井俊介 訳）と『科学の部屋 化石』

はないかと思えます。そして、それで育ってきた人たちが、その後の日本のファンタジーを生み出す力になったといえるのではないのでしょうか。

一方で1960年代半ばから、あかね書房では、評論社の翻訳ものとは趣の異なる幼年向けの童話シリーズや長編ものを出していました。

岡本 ちょうど1966（昭和41）年に、当時は児童

きました（笑）。

野上 それはそうでしょうね（笑）。

『指輪物語』はもちろんですが、評論社の翻訳シリーズは、1970年代以降の日本の児童文学、とりわけファンタジーに大きな影響を与えたので



▲『旅の仲間 指輪物語（上・下）』（J.R.R. トールキン 作／瀬田貞二 訳）

文学作家として著名な寺村輝夫さんに編集長として来ていただき、「創作児童文学選」（全18巻）というシリーズをスタートさせて、1970（昭和45）に完結しました。第1巻目は『ふしぎなつむじ風』（大石真作、斎藤博之絵）でした。

野上 その後は「少年少女長編創作選」（全10巻）が1971（昭和46）年から出ますね。この時代は、あかね書房としてもジャンルを広げていく考えがあったのですか？

岡本 寺村さんが4年間に在籍して、その後を引き継いで山下明生さんが編集長になった時期です。『小説の書き方』

（吉田とし著）や課題図書になった『千本松原（岸武雄著）、『ちゃんめら子平次（筒井敬介著）



▲『ちゃんめら子平次』（筒井敬介 著／斎藤博之 絵）



▲『千本松原』（岸武雄 作／梶山俊夫 絵）

も山下さんの手になるもので、かなり話題になった作品でした。「あかね創作児童文学」は1974（昭和49）年から始まりますが、これらも山下人脈の本です。

野上 岩波書店の翻訳ものとは違った児童書としての評論社、このほかにエピソードはありますか？

竹下 最初にお話ししたように、私自身は児童文学がなんであるかもわからないまま、本の面白さそのものに引っ張られて

（翻訳する）本を選んできた感じですね。自分の好きな本を出してきたということです。

また、装丁や装画についても、アリグザンダーの『タランと角の王』などの「プリティン物語」では、基本的に原書を



▲『タランと角の王』（ロイド・アリグザンダー 作／神宮輝夫 訳）



『ねえ、どれが いい?』（ジョン・バーニンガム 作／松川真弓 訳）

大事にしようということで、本の元の絵を使っています。

野上 そうです、本のケースのイラストも斬新で新しいなと思ったり、ファンタジーだから見返しの地図も洒落ていて、日本の児童文学とは装幀も挿絵も違うなどという印象があります。

ます。『指輪物語』の挿絵は寺島龍一さんでしたね。

竹下 瀬田貞二さんからの紹介で、寺島さんに描いてもらったのだと思います。他の版元との違いを意識することなく、わからないまま自分のペースで仕事をしてきただけだと思います（笑）。

初期の作品は私が選んできたのですが、次第に本を選

ぶこと自体が恐くなってきました。評論社は、家内工業的出版社であって、その仕事は徐々に妻の手に移っていききました。

妻は英文学専攻で、英米の児童文学を読んでいたからです。

野上 瀬田さんの『指輪物語』を翻訳してもらっている頃、時間がかかったと思うのですが？

竹下 瀬田さんにはいろいろと教えてもらいました。妻と妹の3人で、浦和の本がぎゅちり詰まった書斎で話を伺ったのです。瀬田さんに「こんな本どうですか？」と私たちが選んだ原書を預けて、そうしたら2〜3日して「翻訳ができちゃったから！」と、持ってきてくださったこともありましたね。

野上 へえー、そんなに早く翻訳が！

竹下 『指輪物語』は4〜5年かかっています（笑）。

でも、こんなに早く翻訳ができたなら、これは版權を取って出版せざるを得ない、と。絵本で『あした、がっこうへいくんだよ』と、今は絶版になっていますが『どうぶつえんをぬけだしたラクダ』でした。

また、翻訳を依頼した方がいいが、いつまで経っても翻訳が上がってこないこともしょっちゅうでした、人によりますが（笑）。



▲少年少女世界SF文学全集1『鋼鉄都市』（アイザック・アシモフ作／福島正実訳）

野上 版權の獲得のために、苦勞されたことは？

竹下 昔は今と違って、すんなりと取れるケースが多かったですね。いまは翻訳権料が高くなってきていますが、作品によっても違います。当時はだいたい300ドルとか400ドルくらいでしたかね。

野上 『ハリー・ポッター』で何万ドルという金額が出ちゃったから（笑）、『指輪物語』もそんなに高くはなかった、と。

あかね書房でも「国際児童文学賞全集」という翻訳もを出したことがありましたね。

岡本 当時は海外の良い作品を集めて子どもたちに紹介したいという思いが強く、その流れで「少年少女世界SF文学全集」を出したんですね。いずれも山下編集長時代で、この頃、1970（昭和45）年から全104巻

に及ぶ「科学のアルバム」シリーズも出しました。最初は売れなくて返品続出した。品は山だっ



▲子どもたちの好奇心をくすぐった「科学のアルバム」

たようで、制作部長から山下編集長が「在庫の山だから、一度倉庫に見に行ってきたさい」と言われたとか（笑）。しかし、巻数を重ねて、何冊かセットにして学校図書館に案内を出してから動き始めたようです。

野上 写真を使ったり、イラストも図鑑絵ではなく渡辺洋二さんの挿絵を使ったりして、本の造りとしても画期的だったと思いますが、売れなかったというのは初めて聞きました（笑）。

評論社の翻訳シリーズは最初から売れたのですか？
竹下 最初は2、3000部でスタートして、地道に

版を重ねていった感じです。図書館がよく買ってくれました。本によっては装幀を差し替えたりして、それから売れ始めることもありました。

造語などもあって、翻訳は重くて大変な作業です。イギリス人とアメリカ人



▲『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち（上）』（リチャード・アダムズ 作／神宮輝夫 訳）。全編改訳し、装丁も変えた。右が旧版、左が新訳版。

『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』（上下）などは、全編改訳してもらいました。翻訳者によっては、亡くなれる寸前まで改訂のメモを残す人もいて、そういうのを全部、生かさなければいけないと思って、いま進めている本もあります。

野上 現場ではいろいろとご苦労があるんですね。『指輪物語』などは映画化されて、売れたのではないで

では読み方だとかニュアンスも異なるわけですね。そういうことも含めて、再版のときに直してまいります。『グリーン・ノウ物語』などは3回も変えていきます。

すか？

竹下 映画になれば必ず売れるというわけではないですが、映画化されて売れたのは、この『指輪物語』（映画名／ロード・オブ・ザ・リング）と『チョコレート工場』の秘密』（映画名／チャーリーとチョコレート工場）くらいですかね。他にも10タイトルくらい映画になりましたが、ほとんど売れ行きには関係ありません（笑）。

野上 あかね書房の創作シリーズで売れた時期というのは？

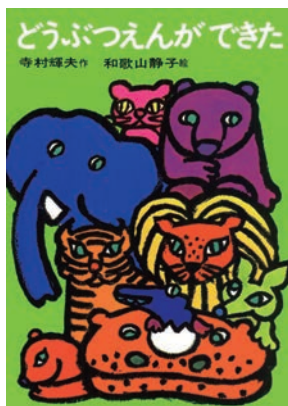
岡本 寺村さんが編集長として入られて、最初に「創作児童文学選」を出したとお話しましたが、その後に「日本の創作幼年童話」シリーズを出して、1作目は1969（昭和44）年にご自身で書いた『どうぶつえんができた』という作品でした。

当時、字体も教科書体の比較的大きい活字を使い、見開きごとに必ず挿絵が入るような本造りをしたと聞いています。このシリーズだけで25巻刊行しました。また、『ふらいばんじいさん』は5巻目で、息の長いロングセラーになっています。

山下さんから聞いた話では、「神沢さんのところで創作童話の原稿ができたので受け取りに行った。お訪ねしたところ2つの作品があつて、どっちにする？」と言わ



▲『ふらいばんじいさん』（神沢利子 作／堀内誠一 絵）



▲『どうぶつえんができた』（寺村輝夫 作／和歌山静子 絵）

れて『ふらいばんじいさん』にした」ということです。もう一つの作品は『くまのこウーフ』（ポプラ社）で、両方もらってあげば良かったという笑い話がありました。野上 それは面白いエピソードですね。ロングセラーということですが、当時の作品でいまも頑張っているのはありますか？

岡本 『はらぺこおなべ』（神沢利子 作／渡辺洋二 絵）や『ジオ

ジオのたんじょうび』（岸田衿子 作／中谷千代子 絵）などの作品は息が長いですね。昔出した既刊本を30冊くらい復刻させたのですが、やはり作品によって売れ行きには凸凹があります



▲『はらぺこおなべ』（神沢利子 作／渡辺洋二 絵）



▲『ジオジオのたんじょうび』（岸田衿子 作／中谷千代子 絵）

ますが、基本的には「出版したら絶版にしてはいけない」という母の教えがありまして、まあ、実際にはそういうわけにもいきませんが（笑）。

『光の旅 かげの旅』（A・ジョナス 作／内海まお 訳）などは出した当初、数年間ほとんど売れなかったのですが、安藤忠雄さんが設計した岡山県直島の地中美術館で月々100冊くらい売ってくれて、年間1200冊！

す。

野上 評論社のロングセラーにはどんな作品が？

竹下 『ぞうのパパー』（J・ド・ブリュノフ 作／やがわすみこ 訳）や『ゆきだるま』（R・ブリッグズ 作）も刊行して続けてい

それがきっかけで知られるようになり、いまでもロングで売れていく作品になりました。

野上 私の印象としては、『せかいのひとびと』（P・スピアー作／松川まゆみ訳）も話題になったいい作品だと思います。このように、例えば同じ年に出た本でも、半世紀が過ぎても残っている本って、一般書に比べると児童書が圧倒的に多いですね。

それは先ほど竹下社長がおっしゃったように「絶版にしない」というお母様の想いから伝わるように、出版社

が作品をフォローし

ながら、大事に生か

し続けているからで

はないかと思います。

いろいろ貴重なエ

ピソードを伺ってき

ましたが最後に児童

書の版元として、今

後の抱負をお聞かせ

ください。

岡本 創業当時か

ら振り返ると、私が

子どもの頃から親し



▲『ゾウのパパール』『パパールのこどもたち』（J・D・ブリュノフ 作／やがわすみこ 訳）

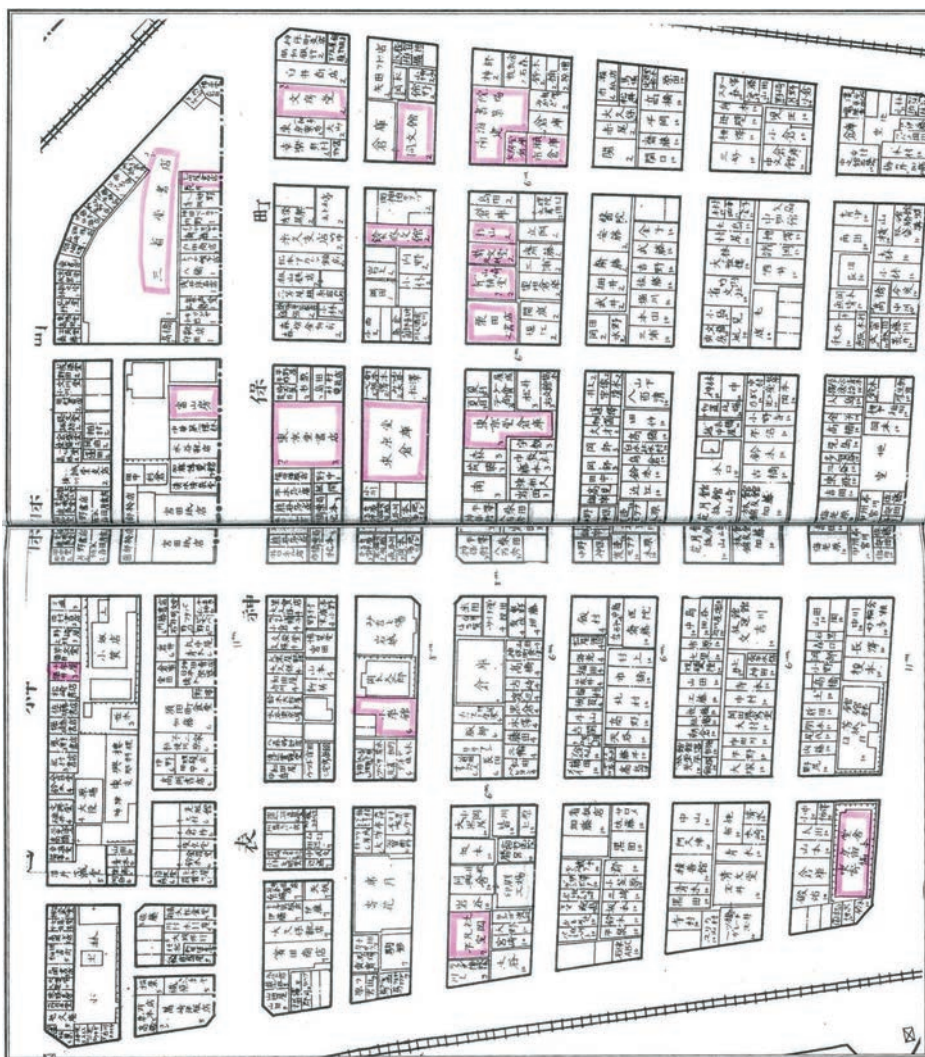
んでいた本が、いまでも読み継がれていることを大事にしたいと思います。

一口に「子ども時代」といっても、あつという間に過ぎていきます。私の経験でも、絵本から活字の多い読み物に移行するのはけっこうハードルが高かった記憶があるので、そうしたハードルを低くするような作品を出版できればいいなと思っています。

いまでは、遊びやなどなどなどの娯楽本も出していますが、それも子どもたちの、本に対するハードルの高さを払しょくしてもらいたいからなのです。

竹下 子どもを十把一絡げにとらえるのではなく、やはり子ども一人ひとりの個性を伸ばして「個」としていかん大切にしていくなかを考えなければいけません。その点、日本児童図書出版協会に加盟している43社の版元が協力しているのは心強いことです。

世界はいま多文化社会の時代にあつて、多様性を必要としています。異質の他者を排除することなく、共生・共存を求めるのが理想であつて、それは私たちが戦後日本を再出発させる際、未来の人類社会の在り方を模索した結果、「日本国憲法」の前文に掲げた理想でもあります。この理想の実現に向けて、私たちは子どもの本と読書から始めたい、と思っています。



▲ 1930（昭和5）年の神保町一丁目 町内居住者案内図。出版社・書店・取次・用紙店など、出版関係の建物が集中しているのがわかる。（『神保町一丁目町会 創立五十年記念 ひとゆめこころ』より）



【特集】子どもの本と神保町

富山房135年の熱い歴史をふり返る

坂本起一（富山房代表取締役社長）

▼早稲田大学のご縁と富山房創業

1886（明治19）年3月1日創業の富山房は、2021（令和3）年で創立135年を迎えました。社名の富



▲「良書を富士山のような高く」という創業の想いが伝わる

山房は、

「富士山のような高い山になるくらい良書を積み重ねよう」との創業の創業者・坂本嘉治馬の

意思が込められています。

嘉治馬が高知県宿毛町すくもから、父の恩人である軍医・酒井融とあるを頼って上京したのは1884（明治17）年、嘉治馬18歳のとき。しばらくして紹介されたのが早稲田大学創立者の一人・小野梓先生でした。小野先生は1883年（明治16年）、神田小川町に東洋館書店を興して、その縁で嘉治馬は、東洋館で奉公するのです。

嘉治馬は一生懸命働き、仕事も覚えたのに、小野梓先生が結核で34歳の若さで亡くなり、東洋館も解散することになります。「自分はもう行くところがない……」と最初は悲観していたものの、生計を立てるために書店を開きたいと思い、小野先生の義兄・小野義真翁（日本鉄道会社社長）に資金援助をお願いをしたのです。

小野翁は開業資金として2000円（いまなら100万



▲芸術品ともいえる「世界童話集」の装幀



▲イソップ物語やガリバー旅行記等を収める「世界家庭文庫」

円ほど)を出資し、小野先生が亡くなって1か月半後、嘉治馬は現在の神田神保町に、ささやかな書店・富山房を開業しました。

当時は周辺に、東京大学・一橋大学・明治大学・専修大学など多くの大学ができて始めていたので(移転も含む)、教科書や参考書を販売しました。出版も早くから手掛け、日本語で書かれた経済原論がなかった時代、そ

の手初めとして

嘉治馬は、小野

梓から託された

天野為之博士の

『経済原論』を

出版し、これが

富山房の記念す

べき処女出版と

なつたのです。

また、東洋館

時代からお客様

であった坪内逍

遙先生と親しく

なり、小学校の

教科書を著して



▲『新訳 トルストイ翻訳集』と『世界童話寶玉集』

いただいたこともあります。また、早稲田大学設立者の大隈重信侯爵も応援してくださり、1892(明治25)年、嘉治馬が地方へ集金に行っている間に、創業まもない富山房が「神田の大火」で焼失してしたときも、見舞金が届けられたほどです。

こうした幾多のご縁があり、坪内逍遙先生の紹介で富山房に入社したのが楠山正雄氏です。楠山氏は大隈重信侯が主催する「新日本」という雑誌の編集主任となり、通巻84号で同誌を終了した後、嘉治馬の依頼に依って、

1915(大正4)

年から児童向け叢書

「新訳絵入模範家庭

文庫」(全22巻)を

編集しました。

自らも「模範家庭

文庫」の『イソップ

物語』や、『日本童

話寶玉集』『世界童

話寶玉集』『少年ル

ミと母親』を執筆

し、富山房のみなら

ず、児童文学史上に

大きな業績を残したのです。

そして編集主任として、1931（昭和6）年に「日本家庭大百科事彙」（全4巻）を、1938（昭和13）年に、「国民百科大辞典」（全15巻）を出版し、嘉治馬と共に名著を世に送り続けました。

▼若造社長の児童書翻訳出版の足取り

1938（昭和13）年8月、健康だった嘉治馬が、風邪がもとで肺炎となり死去。長男守正が二代目社長に就任しました。間もなく太平洋戦争が始まり、出版界も企業整備や用紙不足、社員の出征など困難な時代となりました。

ようやく、1945（昭和20）年に終戦を迎えました。が、空襲で家を焼かれた社員も多く、困難な時代が続きました。幸い神保町の社屋は被災せず、なんとか社業を続けることができました。1939（昭和14）年から編集を始めた「カトリック大辞典」（全5巻）を、1960（昭和35）年に完成できたのも被災を免れたからでした。

しかし、1951（昭和26）年頃から社長の守正の視力が衰え、遂に失明してしまい、そのため重版中心の出版活動しかできなくなりました。そして1960（昭和35）年、守正が癌のため亡くなりました。

守正を援け、毎日会社に出ておりました母「いち」が後ろ盾となって、私が社長を務めることになりました。幸いなことに守正は、亡くなる前年に、かつて1932（昭和7）年に完成した大槻文彦博士の「大言海」（全5巻）の編集部に勤め、その後、辞書部の責任編集者を務めた青池竹次氏に新たに『漢和字典』の編集を依頼し、青池氏もこの依頼を受けて、仕事を始めてくださったっていました。

青池氏は私が小学校に入る前から遊んでくれた人でしたので何かと相談しやすく、結局は富山房の編集部長として社に戻ってくださいました。青池さんと縁がなかったら、吉田東伍著「増補 大日本地名辞書」（全8巻）、「漢文大系」（全22巻）、「新編大言海」などの出版ができなかっただろうと思います。

社長になった私は、幼いころ母に読んでもらった楠山正雄著／新訳絵入模範家庭文庫の「日本童話寶玉集」や「世界童話寶玉集」の物語が心に残っていて、良い児童書を出したいと考えておりました。

▼執念が実った翻訳出版、

『かいじゅうたちのいるところ』

たまたま、カルデコット賞を受賞したアメリカの原書



▲センダックの『WHERE THE WILD THINGS ARE』原書と日本語版

を取り寄せる
と、モーリス・センダックの『WHERE THE WILD THINGS ARE』がありました。一見して、ぜひ翻訳出版したいと思ったのですが、他社がおぼけがすんでいる』というタイトルで出版していたので、あきらめなければならませんでした。

ところがある日、その出版社が翻訳権を返したので、「条件さえ良ければ、またセンダックの他の作品も翻訳出版するなら、富山房にもチャンスがある」という情報をもたらしてくださったエージェントがあり、私は思い切り良い条件と他の作品も出させてもらおうと返事をしました。その結果、契約できて、神宮輝夫先生に翻訳をお願いし、1975（昭和50）年12月に初版『かいじゅうたちのいるところ』を出すことができました。

このころには児童書の編集者も入社し、アーノルド・ローベル作／まきたまつこ訳『いろいろなへんないろのはじまり』、ユージン・トリビザス作／こだまともこ訳『3びきのかわいいオオカミ』、マリー・ホール・エッツ作／たなべいす訳『ジルベルトとかぜ』、オー・ヘンリー作／リスベート・ツヴェルガー画／矢川澄子訳『賢者のおくりもの』などの翻訳絵本を出版しました。

日本の絵本としては、うえのりこ作・絵『ぞうのボタン』、瀬川康男作・絵『ふたり』、菊池清作・絵『サンタのおまじない』、『いちねんのりんご』、かわさきようこ作『かみとあそぼう』、小林カツ代作／上條滝子絵『おいしいものつくろう』、伊藤ちはる作／西山晶絵『いとであそぼう』、鳥居ヤス子作／かわさきようこ絵



▲『いろいろへんないろのはじまり』(アーノルド・ローベリ作・絵/まきたまつこ訳)



▲『3びきのかわいいオオカミ』(ユー・ジーン・トリブザス作/ヘレン・オクセンバリー絵/こだまともこ訳)

『やさいをそだてよう』など、次々と刊行いたしました。

読み物には、エリック・C・ホガード作/犬飼和雄訳『小さな魚』。また、

ジョン・エイクン作の『ウィロビー・チエースのオオカミ』に始まる冒険

物語のシリーズを、こだまともこ先生に翻訳をお願いして完結をめざしています。また、日本語の詩のアンソロジー、はせみつこ編/飯野和好絵『しゃべる詩あそぶ詩きこえる詩』『みえる詩あそぶ詩きこえる詩』等を出版し、現在に至っております。

▼幼少から神保町とともに歩み、ともに発展する

富山房は神保町に社屋を構えて、あと数年で創立140年を迎えますが、社歴を紐解けば何度も火災に遭い、

いつとき^{まなないた}組橋近くの銭湯の2階が事務所だったこともありました。そのときドイツに留学されていた芳賀一先生からのお手紙で、「ドイツには婦人のための百科事典があつてたいへん便利だ。日本にはまだ百科事典というものがなくて、自分が帰国したら作りたい。そのための準備をしておくように」と連絡があり、「風呂屋の2階で将棋を打っている場合ではないぞ」と気合をかけられたこともあつたそうです。

先生が帰国されてから、この企画は「日本家庭百科事典」として完成、大変売れたそうです。このとき編集者として入社した長谷川福平氏は、永く富山房の重鎮となりました。

私が子どものころは、よく三省堂や文房堂に文具を買いに行きましたし、すずらん通りのダイソーがある場所には「雄飛堂」という模型屋さんがありました。戦時中のことです。零戦のソリッドモデルの他にB17とかロッキードP38などもあつて、そっちのほうがカッコよく、父に買ってくれと頼んだのですが、敵国の飛行機はダメだ!と却下されてしまいました。

すずらん通り商店街の方とは、個人的なお付き合いがなく、全て会社の総務に任せておりましたが、社屋建替工事のときにご挨拶に伺ったのが契機となって、会合に



▲『ふたり』（瀬川康男 作）

も出席するようになりました。

そのころ、
 すらん通り
 を改修するの
 で会議に出る
 ようにと言われ
 出席する
 と、そこで東
 京堂書店の大
 橋信夫社長に
 お会いしまし

た。当時、商店街会長は天麩羅はちまきのご主人・青木寅吉さんでしたが、80を超えるご高齢で引退されることになり、また、通りを区や都の予算を使って電線地中化などの改修をするので、従来の任意団体ではなく振興組合となるように、と区からの指導がありました。

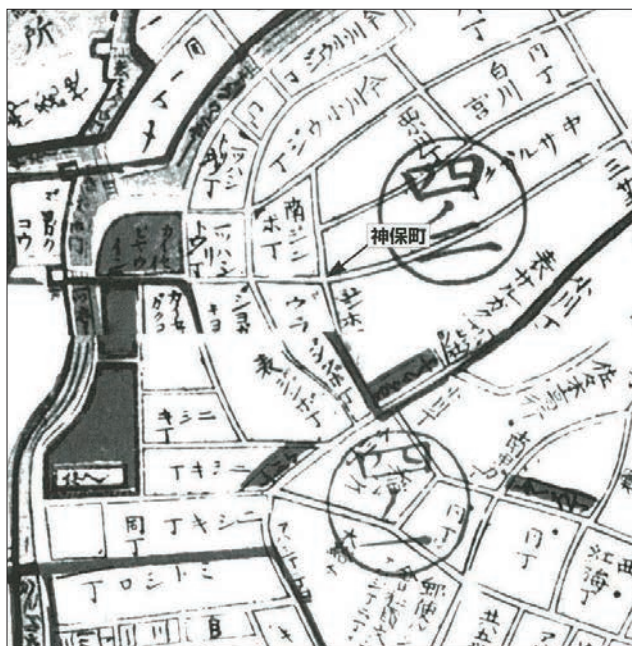
いろいろと経緯があつて、新たに商店街振興組合となり、理事も決まってから理事長を互選することになり、結局、前理事長の青木さんの「あんたやつてくれ」の鶴の一声で私が引き受けることになりました。

私は大橋さんをお願いしたかったのですが、私が少し年上だったので、「（坂本）先輩を差し置いて、私が引き受けるわけにはいきません」と言われてしまい、とうとう私が受けることになったのです。

▼神保町ブックフェスティバルのエピソード

そしてまもなく、どなたが言い出したのか「坂本さんが商店会長のうちに神保町ブックフェスティバルをやるう！」ということになり、土曜と日曜にすらん通りを通行止めにして、新刊本を、ちよつと汚れておりますので、と言うキャッチフレーズで、ワゴンセールの催事を実行する計画が持ち上がったのです。

そして知恵のある人たちが集まって、次のことが決まりました。まず古書店組合の了解を得て「神田古本まつり」の開催中に「神保町ブックフェスティバル」を開催すること。そうでないとお客様が集まらないからです。そのために、八木書店の八木壯一社長に実行委員になっていただくこと。神田警察に2日間の通行止めを許可してもらうこと。この2つができなければ、催事開催は覚束ないので……。そして、いずれもOKとなり、明治大学プラスバンドの行進とテープカットで神保町ブックフェスティバルが始まりました。



ここ2年はコロナ禍で中止になっていますが、かれこれ20年以上も神保町ブックフェスティバルが続いていることは、神保町の人間として本当に嬉しいかぎりです。今後も良き児童書を出し続け、子どもたちと子どもの本を愛する人たちに喜んでいただけたら、こんなに望外なことはありません。



◀ 神保町の東京改正全国。上：1875（明治8）年、下：1877（明治10）年の神保町交差点付近。（『神保町一丁目町会 創立五十年記念ひとゆめこころ』より）

神保町が好きだ！

神保町が好きだ！ 第15号 2021年11月13日発行

発行人：八木壯一

発行所：本の街・神保町を元気にする会

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町1-1 三省堂書店神保町本店内

電話 03-3295-1881

編集：株式会社風讀社「ナビブラ神保町」編集部（校条 真）

表紙写真撮影・本文図版提供：野上 暁

編集協力：佐藤善孝、大久保徹也

印刷：モリモト印刷株式会社

募集締め切り
令和4年4月30日

小説募集

第17回



めざせ！大賞
テーマ・ジャンルは自由

大賞1編
100万円(予定)

- 【募集作品】日本語で書かれた未発表小説。テーマ・ジャンルは不問。
千代田区縁の人物や区内の名所・旧跡、歴史などを題材にした作品
を歓迎します。(ただし、このことの有無が選考の基準とはなりません)
- 【応募資格】年齢・住所・職業は問いません。
- 【原稿枚数】A4サイズ用の紙(横長)に40字×40行の縦書きで印字し
10枚以上30枚以内。
- 【選考委員】作家:逢坂 剛氏・唯川 恵氏・角田 光代氏
※大賞とは別に、区の持つ文化的・歴史的魅力をアピールする作品を
千代田賞として表彰します。
- 【お問合せ】〒102-8688 千代田区九段南1-2-1
千代田区文化振興課「ちよだ文学賞」係
電話 03-5211-3628 Eメール bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp

◆詳細は区ホームページ・募集要項でご確認ください。

主催／千代田区

共催／読売新聞社 後援／小学館

協力／三省堂書店・東京都書店商業組合千代田支部

神田古書店連盟・東京堂書店・(一社)日本書籍出版協会

本の街 神保町を元気にする会